

---

鳥海空

よしき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳥海空

### 【Nコード】

N1831C

### 【作者名】

よしき

### 【あらすじ】

不思議な出来事。恋する事。僕達は不思議から始まる。特別な女の子「鳥海空」そして僕達は恋をする。

## 1・とり

とり

「ちょっと待って！」

呼んでも振り返りもしない、彼女の肩を反射的に掴んでいた。

彼女は静かに振り向く。

教室で見せるいつもの無表情。

誰かがこんな事を言っていた。

—あいつには感情がないんじゃないか？—

実は僕もそれには同意見だった。

近くで改めて見る彼女の顔は綺麗だと思う。

しかしその顔から感情が表れることは一度もなかったからだ。

やっとの事で振り返った彼女はじっと僕の顔を見る。

真っ直ぐに、僕を射抜くような視線。

まるで、子犬や子供の様な無垢な眼差し。

何故か分からないけどそれが僕の胸を締め付け、言葉を失わせる。

彼女に聞きたい事は山ほどある。

ここ数日の不可解な出来事について。

でも僕の心は躊躇する。

—何をどう聞けっというんだ？—

こうやって考えていても、答えなんか出てくるはずもないのだけ  
れど…。

最初は一枚のCDだった。

いつの間にかカバンの中に入れられていた。

中身は聞いた事のない音楽。

奇麗な声の主は不思議な言葉で歌う。

歌詞の意味や、そのジャンルは全然解らない。

でも、懐かしいような、新しいような、不思議な音色。

それを聞いた途端、僕の体の中でパチンと音がした。

そして次の瞬間、僕は涙していた。

意味も理由もなく。

暫らく泣き続けた。

後で気がついたのだが、CDの白いレーベル面に「空」とだけ書かれていた。

それから数日経った頃。

家に帰ると僕の机の上に手紙が置いてあった。

僕宛の封筒で差出人については何も書かれていない。

封を切ると一枚の写真が出てくる。

広い芝生の野原に立っている男女の後姿。

2人は僕らの通う学校の制服を着ている。

気のせいか男の後姿は自分のような気がしてならなかった。

でも、こんな写真を撮った覚えも無いし、隣の長い髪の女性に特に心当たりも無い。

何故こんな写真が送られてきたのだろうか？

疑問に思い封筒を見直すと切手が貼られていなかった。

それだけならば、誰かがポストに入れたのだろうと考えられる。

しかし、家族は誰もその封筒の存在すら知らなかったのだ。

となると、誰かが僕の机の上に直接置いていったとしか考えられない。

何かが僕の周りで起こっている。

それだけは分かる。

湧き上がる不安と、胸の中で何かざわめくものを感じる。

でも今は、それが何なのか分からない。

ざわめく胸を押さえながら、何気なく写真を机の引き出しにしまった。

そして昨日の夜の事。

夜中にふと目が覚めた。

いきなりだった。

何かのスイッチが入ったように。

電気を点けようと立ち上がった時。

コツコツ。

窓から小さな音が聞こえた。

カーテンを開けるとそこには小鳥が僕の部屋を覗き込んでいる。

小鳥は何度も窓をくちばしで叩いている。

窓に近づくと逃げの気配を見せない。

僕はそっと窓を開けた。

チョン、チョン、と跳ねるように部屋に入ると羽ばたきグルリと天

井近くを回る。

そして机の上に飛び降りた。

その人懐っこさに呆れながら、小鳥を覗き込む。

小さな頭を2度3度傾げ、僕の顔を見上げている。  
かわいい仕草に顔がほころんでしまう。

「お前、人が怖くないのかい？」

答えるはずもないのに話し掛ける。

自分でも幼稚な行為だと、顔を赤くしてしまう。  
でも。

でも小鳥は、こう答えた。

「ごめんなさい。あの、佐藤：洋一君。私、鳥海なの。同じクラスの…」

—とりうみ そら—

僕は全てを理解した。

まるで数学の公式が当てはまった時の様に。

英単語や文法の全てを思い出し、英文を読めた時の様に。

誰が今までの出来事の犯人なのか。

「鳥海 空」

長い髪をした、おとなしい女の子。

背が低くて、極度のあがり症。

そういえばそんな女の子がいたかな、と言った程度のクラスメート。  
疑問が頭に渦巻く。

何故彼女がCDをくれたのか？

どうやって手紙を机の上に置いたのか？

小鳥をどうやって喋らせているのか？

そして、何故こんな事をするのか？

この日から僕の中で「鳥海 空」の名前は特別な物となった。

## 2・うみ

うみ

「鳥海空」の名を語る小鳥は暫らくの沈黙の後、口を開いた。

「あの、こんな夜中にごめんなさい…。どうしても、その、伝えたくて…。

自分でも変なの。分かってるの。いままでと違う自分みたいで怖い。

佐藤君の事考えると、その、何て言うか…。

あの、気がついたら私、鳥になっていたの。解らないけど、私は鳥で、ここに向かって飛んでいるの。おかしいよね、鳥って夜目が利かないはずなのに…。」

「でも、私、会いたかった…。」

「会いたかったの。その、佐藤君に。私の事知ってもらいたくて、自分でも変なのは分かってるんだけど…。

あの、それだけ。それだけなの…。だから気にしないで。

ごめんなさい。あの…本当にごめんなさい。」

一気にまくし立てた小鳥は窓から飛び出し、真一文字に暗闇に飛び去っていった。

気にしないでって…無理だよ。

何なんだよ、お前…。

僕はただ、混乱した頭で小鳥の飛び去った暗闇を見つめるしかなかった。



その夜、夢を見た。

今までにない、奇妙な夢。

ある時、僕は天使と出会う。

それは鳥海だった。

僕は彼女の手を引いて何処かへ逃げてゆく。

またある時は狭い部屋の中。

手錠をかけられた鳥海と、その体を抱きしめる僕。

次々と場面が変わってゆく。

でもその中で変わらないものは、僕と鳥海が存在だった。

機械の体になってしまった鳥海。

彼女に花束を贈る僕。

歌を歌っている。

あのCDの歌。

様々なイメージ。

せき止められていた何かが外れてしまった様に僕の中に流れ込んでくる。

僕は翻弄され、受け止め、そして変化してゆく。

少しづつ、時に急激に。

僕は、前とは違う、僕になってゆく。

そして僕は空になった。

雲を抱き、鳥を抱え、光を与えながら。

目の前に僕がいる。

青い空を映す大きな鏡。

でもどこかが違う。

雰囲気？

色？

風が鏡を掻き乱す。

それは海。

大きな、大きな、海だ。

そしてそれは鳥海。

そうだと確信する。

同じ青。

この世界を構成する青い色。

でも違う青。

深く。

暗く

薄く。

明るく。

僕達は同じ青色。

でも、独立したそれぞれの青色。

海の青と空の青。

僕は鳥海に手を伸ばす。

彼女もそうしてくれている。

でも、届かない互いの手。

僕達はどこまでも広がってゆく。

両手を広げたよりも遠く、遠く。

果てなく、果てしなく広がってゆく。

僕達は地平線の果てまで到達する。

そしてその果てで一つになり。

やがて、僕達は世界を赤く染めた。

### 3・そら

そら

「ちょっと待って！」

呼んでも振り返りもしない、彼女の肩を反射的に掴んでいた。彼女は静かに振り向く。

僕は知りたかった。

不思議な出来事。

今、何が起きているのか。

そして、僕の中にある不思議な感情を。

鳥海は無表情に黙って立っている。

その目は真っ直ぐに僕の心まで射抜こうとするように。

肩にかけたままの手を慌てて引っ込める。

僕は言葉を、そして心を失ってしまう。

「あ。。。」

「あ。。。」

同時に声を上げる。

しかしお互いの声に遠慮して続けられなくなってしまおう。パチン。

鳥海の声聞いた瞬間、僕の体の中で音がした。

コレハ、ナンダ？

ナンノ、オトダ？

ボクハ、カワツテユク。

イママデトハ、チガウ、ボクニ。

鳥海の指が僕の胸に触れる。

そして僕の胸を開いてゆく。

その中には配電盤のようなパネルに無数のスイッチ。  
彼女の指がそのスイッチを一つ指で弾く。  
パチン。

微笑んだ彼女がスイッチを入れた。  
それは瞬間の夢。

瞬きをした瞬間、僕たちはさっきまでの様に向かい合っている。  
今のは…夢？

でも、一つ分かった事。

僕はやっとの事で理解した。

不思議な出来事。

それは不思議でも何でもない。

不可解な感情。

それは当たり前前の出来事だったのだ。

そう。

僕はいつの間にか彼女、鳥海空に恋をしてしまっていた。

そして、多分、鳥海も…。

意識は鼓動を早め、僕の頭の中を掻き乱す。

いったい、何をどう聞けって言うんだ？

僕は心を落ち着かせながら、彼女の顔を見つめる。

どこか、恥ずかしそうな、うっすらと赤くなった頬。

小さな花びらの様な唇。

海の深さと、空の果てしない色を含んだ瞳。

パチン。パチン。パチン。

僕の中でスイッチが加速度を増して切り替わってゆく。

僕は思い切って口にする。  
その、清らかなる名前を。

「鳥海！」

「佐藤君！」

2人の声のシンクロ。  
違う言葉のユニゾン。  
世界が開いてゆく…。

世界は青に包まれている。

世界を構成する物質。

それは青色。

激しくも穏やかな、深い色。

悲しくも柔らかな、抜けるような色。

僕達の手は繋がれ、空に放り出されてしまう。

言いたい事は、青い色に変換され、世界を満たしてゆく。

歌が世界を包み込む。

CDで聞いた歌。

青い世界を。

それは2人の声。

声が聞こえる。

想いには翼が生える。

これは夢じゃない。

きおく。

とおい。

それは、うまれ。

螺旋の想い。

君に届け。

眠らない夜。

眠れない夜。

花のように。

月に照らされた影の如く。

太陽が焼き付ける影の様に。

いつも。

いつか。

「会えたらいいね。」

ポン、と誰かが背中を押した。



それは一瞬の夢。

瞬きとともに、一言も語っていない僕達は見つめあって立っていた。

「今の…?」

「私…佐藤君も?」

「うん…。」

「何で…?こんな事が…?」

「解らないけど…こんな事初めてで…。」

「でも…。」

言葉のシンクロニシティー。

その瞬間。

僕達はどちらともなく笑い出した。

何て言ったら良いんだろう?

嬉しくて。

楽しかったんだ。

お互いの声が嬉しくて、笑い声は大きくなってゆく。

幸せだから。

いつの間にか自然と僕達は手を繋いで笑いあった。

不思議が世界を満たし、そこら中に潜んでいる。

僕達はその一番大きな不思議を同時に捕まえた。

恋という、不思議を。

「これから、よろしく。」

僕の言葉に鳥海はゆっくりと頷く。

恋は不思議だ。

昨日とはまるで違う世界を見せ、人を変えてゆく。

僕達はきつとその不思議を探し、解き明かすために出会ったのだらう。

心は鳥になり、想いは海になり、全てを空に放とうとする。

僕達は手を繋ぐ。

何かを伝えようと。

僕達は言葉を交わす。  
交差しようとして。

「私こそ、よろしくね。」

「鳥海 空」は僕にとって世界で一番不思議な女の子。  
告白も、きっかけもなく、僕達は始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1831c/>

---

鳥海空

2010年10月28日08時09分発行